

分水嶺レンベルク —— 象徴としての地誌 ——

伊 狩 裕

1.

プラハのヴルタヴァ、クラクフのヴィスワのように、レンベルク¹は川の名を呼び起こさない。川は、要塞や交易路として、また住民の生活の基盤として町の成立と発展に不可欠であり、また町に独自の景観を与えてきた。町は川に沿って生まれ、川は町の歴史、伝説を形づくり、共同の記憶を喚起する場ともなってきた。たとえばヴルタヴァ川はチェコの建国伝説²に欠かすことができず、「わが祖国」を滔々と流れ、クラクフのヴィスワ川もまた女王ヴァンダの名と深く結びつき、クラクフの歴史とポーランド人の愛国心を支えてきた。B. ヴイツツキはヴァンダ伝説を次のように伝えている。

クラクス王の死のあと、その娘の若いヴァンダが王位について、賢く、正しく国を治めていた。その功績と美貌の名声は、はるか遠方におよび、ついには、ドイツの王子リッティンガーの耳に達した。

この王子は、ヴァンダの話を目にすると、この美しいポーランド女王をぜひとも妻に迎えたいものだと思い、ヴァヴェル城に仲人を送った。しかし、ヴァンダ女王は、少しもためらうことなく王子の求婚を断って、ポーランド国民の敵であるドイツ人と結婚することは承知できないと告げた。

深く心を傷つけられて、復讐心にとらわれたリッティンガーは、部下の戦士を集め、みずから軍隊の先頭に立って、ポーランドの国に押し

『GR—同志社大学グローバル地域文化学会 紀要—』14, 2020, 65—96頁。
同志社大学グローバル地域文化学会 ©伊狩 裕

入り、ヴァンダ女王を奪って、力づくで従わせようとたくらんだ。この知らせが若い女王のもとにとどくと、彼女は神殿におもむき、そこで、もしもドイツ人を打ち負かす手助けをしてくださるなら、自分の命をさし上げましょう、と神々に誓いを立てた。そのあと父の剣を手にとって、みずから軍隊の先頭に立ち、敵を迎え撃つために出発した。血で血を洗う戦いの末に、ドイツ人は打ち破られ、リッティンガーも戦死をとげた。危機から救われた国民は、勝利者の勇敢な女王をほめたたえた。だが、国をあげての喜びは長くはつづかなかった。ヴァンダ女王は、神々に対して、勝利への感謝の祈りを捧げたあと、自分の誓いを守るために、ヴィスワ川に身を投じて、波間に姿を消してしまったのである³。

ヴァンダ (Wanda)、ヴァヴェル (Wawel)、ヴィスワ (Wisła) という頭韻の等価にも支えられたこの伝説は今日もクラクフから抜きがたい。

ところが、ハプスブルク家所領ガリツィア・ロドメリア王国の首都レンベルクには川がない。20世紀の初めにレンベルクで青春の一時期を過ごしたユダヤ人ポーランド語作家ユゼフ・ヴィットリンは、「ルヴフにはクラクフのヴァンダのような、溺死した王女がいなかった。これはひょっとしたらルヴフには川がないせいかもしれない。[...] ルヴフには歴とした川もなければ伝説もない」⁴、すなわち、川がなければ伝説の生まれようもない、と「わがルヴフ」をクラクフに引き比べて歎いている。

だがレンベルクの歴史を遡ると、この町は決して初めから川を欠いていたわけではなかった。13世紀中葉にウクライナ人によってその礎が築かれたこの町の起源を、歴史家クリプヤケーヴィチは次のように伝えている。

リヴィウはその始まりをハーリチ・ヴォロディーミル王ダニーロに負っている。タタールから国を守るために、ダニーロはハーリチ、ヴォリーニ、ホルムシチナのさまざまな場所に強大な城塞、すなわちホロドを築いた。こうして王はポルトヴァ川が流れる谷間の丘にも城

を築き、それを未だ年若い息子レフの名にちなみリヴィウと名付けた⁵。

ダニーロも、500年余りのちにハプスブルク家所領ガリツィア・ロドメリア王国の首都となるこの町を、他の町の例にもれず、そもそもは川、すなわち「ポルトヴァ川」のほとりに卜したのであった。さらにクリプヤケーヴィチは、「ポルトヴァは西に対して、町の自然の要塞であった」⁶、「ポルトヴァは大きな川であり、かなりの水量があり、しばしば氾濫し、郊外に大きな被害をもたらした」と述べ、1511年、1514年、1770年、1853年、1872年の大きな氾濫を書き留めている。「1770年には水は低いところにあったピアホールと、重要な人物たちが埋葬されていた教会の地下室に浸入し、水が引くと遺体が腐り始め、町では疫病が蔓延しそうになり」、1853年には、「水は二人の子供を飲み込み、一人は助けられたが、一人は溺死し」、1872年の氾濫が「ポルトヴァ最後の氾濫となった」⁷と述べているが、「最後」とはすなわち、その後、19世紀末から20世紀初めにかけてポルトヴァは、ヴルタヴァやヴィスワのように伝説を生むこともないまま暗渠化され、二度と氾濫することはなかったからである。

だが埋設以前のポルトヴァの規模に関する記述は一様ではない。「大きな川であり、かなりの水量があり、しばしば氾濫した」というクリプヤケーヴィチの記述とはまったく相反する証言も残されている。18世紀末のレンベルク大学博物学教授ハケットは、埋設される100年ほど前にすでに、ポルトヴァはとうてい川と呼べるような代物ではなく、それどころか、レンベルクにはそもそも「川がない」とまで断じている。

この町にはたったひとつ、地形のうえで奇妙な点がある。すなわちここには水がないということである。水がない、とはすなわち川がないという意味である。この事実、すなわち一王国の首都に川がないなどというのはヨーロッパではほかに例がない。レンベルクにはペルテフという名の川があるということは、すべての地理学の書物に記されているが、しかしそれは真っ赤な嘘である。ペルテフはとても小さな小

川なので、夏には鼠が、泳ぐまでもなく走り回っている。ほとんど水車を回すことも出来ないこの細い哀れな小川の深さは、せいぜいのところ2ツォルしかない。その源は町の近くの砂山にあり、この小川は数マイル流れるとブークという名の小さな川に注いで再び失われてしまうのだ⁸。

これは1770年の氾濫から20年余り後の記述であるが、博物学者ハケットは、その名を挙げていながらポルトヴァを川とは認めない。同じ頃、1800年に警部としてレンベルクに赴任し、その後レンベルク大学で統計学を教えたローラーも、レンベルクには「川がない」としたうえ、次のように小さな、水量の少ないポルトヴァについて書き残している。

そもそもこの首都は周囲に川がないので輸送に適した場所ではない。ペルテフはとても小さいので、新たに取水口が作られたにもかかわらず、大きな火災が起きた場合ほとんど水量が足りず、消火ポンプを満たすことができない⁹。

「かなりの水量がある大きな川」と、深さ「せいぜいのところ2ツォル」で鼠が河床を走り回る「細い哀れな小川」とを同一の川として納得するのは難しいが、おそらくレンベルクの地形がポルトヴァに二つの顔を与えたのであろう。ダニーロがこの町を建設したのは「ポルトヴァ川が流れる谷間」であったという。「レンベルクは深い谷のなかにあり、周囲を山や丘で囲まれ」¹⁰、降雨は四方から谷底に集中し、雨量が多くなるとポルトヴァは一気に水嵩を増し、たびたび数メートルの堤を越え町に被害をおよぼしたが、他方、乾季にはほとんど干上がったということなのであろう。

ポルトヴァ埋設後の1906年にレンベルクにやってきたヴィットリンは、「細い哀れな小川」としてのポルトヴァさえ目にもすることなく、「私の同世代の人間は一度もペウテフを眼にしたことはない。せいぜいのところその臭いを嗅いだけである」と述べ、「年配の人々」から聞いた話を伝えている。

ペウテフは大変な悪臭を放ち、また浅かったので、あえてこの怪しげな流れに愛国心から身を投じようなどという王女は一人としていなかったし、純粋に私的な理由からそれを敢行しようとする市井の御爨どももいなかった。それでわれわれの父の時代にペウテフは埋め立てられ、下水道の役割へと格下げされたのであった。今、ペウテフは地下で泣いている¹¹。

氾濫時にも渇水時にもポルトヴァは疫病の源と見なされていたようである。1836年に埋め立て前のポルトヴァに面した警察庁舎¹²に生まれたザッハー＝マゾッホは、12歳までこの建物で過ごしている。父はレンベルクの警察署長であったが、当時警察庁舎は署長一家の住居も兼ねていた。「浮浪者や縛られた犯罪者を引っ立ててくる警察官、暗い顔をした官吏たち、忍び足で歩く貧相な検閲官、相手の顔をまっすぐ見ようとはしない間諜たち、拷問台、格子の嵌った窓、そのあちらこちらから顔を覗かせる厚化粧した娼婦やメランコリックに青ざめたポーランド人の謀反人たち」がいやでも目に入り、「決して楽しい環境ではなかった」¹³とザッハー＝マゾッホは回想している。社会の底辺を徘徊するアウトローたちと日夜顔を合わせねばならない住居は子供を育てるにはふさわしい環境ではなかった。「幸いなことに、私が彼らを眼にしたのは冬だけであった」¹⁴とザッハー＝マゾッホは付け加えている。すなわち、毎年夏になると両親は息子ザッハー＝マゾッホをレンベルク近郊の村ヴィニキの別荘で過ごさせたのであったが、これは、警察庁舎という環境からの疎開であると同時に、自宅の目の前にあり、特に夏になるとひどい悪臭を放つポルトヴァという疫病の源からの避難でもあった。母方の祖父、医学博士フランツ・マゾッホは、当時レンベルクにおける伝染病の権威で、ガリツィアにおいて初めて種痘のワクチン接種を始めた人物であった。初孫のザッハー＝マゾッホを夏季にヴィニキに疎開させるについては祖父フランツ・マゾッホの強い慫慂もあったのであろう。フランツ・マゾッホは、すでに一人息子をチフスで亡くしていた。1830年代初頭、ヨーロッパ各地で不衛生に起因するコレラが大流行し、パリでは1832年「3月から9月のあいだに、18,402人の死者を出し」¹⁵、ウィーンでも「1831～32年にかけて

およそ4,200人のウィーン市民がコレラの犠牲となり」¹⁶、レンベルクも1830～31年にコレラ禍に襲われ、1827年に63,904人であった人口が、ザッハー＝マゾッホが生まれる前年1835年には54,678人に減少している¹⁷。各都市ともこれを契機に下水道の整備に本腰をいれることになる。「(下水道の)大改造を引きおこすには、なんとといってもコレラの流行が必要だった」¹⁸(ヴィクトル・ユゴー)のである。

レンベルクが近代都市へと生まれ変わるためにも、疫病の根源、中世の残滓ポルトヴァは埋め立てられねばならなかった。

2.

ポルトヴァの埋設工事は1883年に本格的に開始され、市の西部を貫くヘチマン堤(現在の自由大通りの一部)とアカデミック通り(現シェフチェンコ大通り)における埋設は1890年代の初めにほぼ完了し¹⁹、その後さらに町の南北に向かって継続されてゆく。この工事は、19世紀のパリ、ウィーンなどでも行われたように、産業革命による社会・経済構造の変化、人口の急激な増加ともなって行われた、インフラ整備を含む市全体の大改造の一端であった。

レンベルクの産業革命は1850年代のボリスラフにおける石油採掘を機に始まった。レンベルクの南、ボリスラフ周辺は以前から、臘燭、アスファルトなどの原料となる地臘の産地として知られていたが、1853年にレンベルクで、匂いが少なく安全な石油の精製法が開発され、また扱いやすく安全な石油ランプが発明され照明器具として実用化されると、石油に対する需要は高まった²⁰。

初期の石油採掘はもっぱら人力に頼ったものであったが、背後のガリツィアの農村が安価な労働力の供給源となった。ガリツィアは、1847年、1849年、1855年、1865年、1876年、1889年に飢饉に見舞われ、19世紀後半、農民たちは慢性的な食糧不足に苦しめられ、餓死する者も少なくはなかった²¹。農民たちは生存のために土地を売却し、大土地所有者に低賃金で雇用される

農業プロレタリアートとなるか、「大挙してガリツィアから南ハンガリー、北アメリカ、ブラジル、ベッサラビア、ルーマニア、ヴェルニアなどに移住」²²して行ったとイヴァン・フランコは述べているが、ガリツィアを出なかつた者たちは、1860年代後半から急速にその距離を伸張しつつあったガリツィアの鉄道建設や、石油採掘、都市の土木建築現場などで労働力を売って糊口を凌ぐほかはなかつた。労働シオニストS.R.ランダウは、ボリスラフの油田地帯の労働者たちについて、こう報告している。

就労のチャンスに誘われ、ここで仕事を成し遂げ、自らの力によって新たな価値を創り出そうと何千人という単位であらゆる地域から集まってきた人々は、自分たちの成果に与ることができない。彼らには、肉体と生命を保持し、子孫を残すのに必要な最低限のものしか手に入らない。というのもここでは、冷酷な賃金法のシステム、さらに女性や児童の労働、それどころか女性の夜間労働までもが隆盛を極めているからである。労働者保護法などはここでは風聞に過ぎない²³。

不健康な、死と隣り合わせの過酷な条件下で一日12時間働いても、その日当は一家がかりうじて餓死せずにすむ程度であった。それでも人々は、「ボリスラフへ行こう、金を稼ぎに。そこから戻ったら旅籠の主になるんだ」²⁴、と夢を抱いてガリツィアの各地から石油地帯ドロホーヴィチ、ボリスラフ周辺に集まってきた。

石油採掘が本格化する以前の1860年代には500人にも満たなかつたボリスラフの人口は、1898年には12,000人に膨れあがり²⁵、隣町ドロホーヴィチの人口も、1882年から1914年の間に18,000人から38,000人に倍増した²⁶。

ガリツィアには、オーストリア国内のみならず、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ、カナダから石油関連業者、金融業者などが蝟集した。1880年代にはカナダの石油採掘業者W.H.マクガーヴェイが本国から掘鑿機械を持ち込み、ガリツィアの原油生産は一気に加速する。A.F.フランクによれば、「20世紀初頭、マクガーヴェイとベルクハイムのカルパチア会社は2,400人の労働者を雇い」²⁷、マクガーヴェイは「オーストリアの石油王」²⁸と呼ばれた。

「1900年には97のガリツィアの町村に1,722の石油関連企業（調査、掘鑿、採掘）があった。そのうち、実際石油を採掘していたのは120社であり、34社が掘鑿を開始し」²⁹、ガリツィア全体で1909年のピーク時には年産200万キロリットルの原油を生産し、これは世界の原油生産の5%にあたり、ガリツィア・ロドメリア王国は、アメリカ、ロシアに次いで世界第3位の産油国となった³⁰。当時のガイドブックによれば、「ボリスラフは、カナダ式のシステムによって掘鑿するボーリング櫓の森」³¹の観を呈していたという。マクガーヴェイの会社は、「1900年に投資家に15%の配当金を支払い」³²、「ロンドン、パリ、ブリュッセル、ベルリン、ウィーン、そしてニューヨークの新聞はガリツィアの石油生産量と価格の統計を掲載し、ヨーロッパ中、アメリカ中の投資家たちがそれらを仔細に研究した」³³のであった。

レンベルクは中世以来、東西南北の交易路が交わる要衝であったが、19世紀後半、それらの交易路に沿う形で鉄道が施設され、「オーストリア・ハンガリー帝国の最も大きな流通の拠点の一つ」³⁴となった。油田地帯への出入り口にもあたっていたレンベルクには、あとで見るように内外の金融機関のビルが犇めいた。

ガリツィアの石油に関して、ウィーン政府は当初、帝国採鉱特権の対象であると主張したが、ガリツィア領邦議会、すなわちポーランド人たちの強硬な抵抗にあい、1862年1月、石油に対するガリツィアの権利を認めざるを得なくなる³⁵。ガリツィアのポーランド人たちにとってこれはただ権益の問題であるのみならず、民族の自治の問題でもあった。ハンガリーがアウスグライヒによって事実上の独立を獲得した翌1868年、ガリツィア領邦議会は教育と司法のポーランド語化を決定したうえ、「ガリツィア決議」³⁶を採択し、ハンガリー同様の特別な地位をガリツィアにもたらしよるような、金融、財政、司法を含む広範な自治権の拡大要求を帝国議会に提出した。帝国議会がこれをそのまま承認することはなかったが、しかしその後「ウィーン政府はガリツィアに対しては、政令や領邦法、あるいは行政措置によってポーランド人の意に添うよう対処した。ポーランド語は領邦のいたるところで優遇され、とくに官庁の内務において、そして学校においてその影響は顕著になった。財政の分野においてもポーランド人たちに対して歩み寄りがなされ、帝国末

期の数十年においては莫大な金額がガリツィアの鉄道建設、道路建設に対して、また文化的目的、行政上の目的のために提供された。³⁷

レンベルクも1870年10月に「定款都市」(Statutarstadt)³⁸の地位を獲得し、その自主的な権限は大幅に拡大した。「王国首都レンベルクに対する定款」(Statut für die königliche Hauptstadt Lemberg)第30条によれば、「市道、橋、街路、広場の建設と維持に対する配慮、同様に道路交通と水域の安全と快適に対する配慮」は「自主的権能範囲」(Selbständiger Wirkungskreis)³⁹に含まれ、市のインフラ整備のためにはもはやウィーンの官僚主義的繁文縟礼に煩わされることなく、自主的に、迅速に市の改造を進められるようになった。財政的にはオイル・マネー、政治的にはガリツィアの自治の拡大、そして行政的にはレンベルクの定款という3条件がそろい、市はポルトヴァの埋設を含む都市改造を始めることができるようになった。

定款の2年後の1872年、これはポルトヴァ最後の氾濫の年にもあたるが、この年にポズナニ出身でベルリンで建築を学んだポーランド人建築家ユリウス・ホホベルガーが市の建設局長に就任し、レンベルク工科大学(ポリテクニカ)に建築学科が新設され、レンベルク出身のアルメニア系ポーランド人建築家ユリアン・ザハリエーヴィチがその初代の正教授となる。ユリアン・ザハリエーヴィチはウィーン大学の建築学科を卒業後、同地で鉄道建設管理部門に勤務しながらレーオポルト・エルンストの建築事務所で研鑽を積み、1871年にレンベルクにリングシュトラッセの歴史主義の美学を持ち帰ったのであった。この年をもってレンベルクの近代都市への歩みが加速する。市の近代化が進行した1869年から1910年の間にレンベルクの人口は87,100人から206,100人と2.5倍近く増加している⁴⁰。水が低い所に着くように、人々がガリツィアの各地から、飢餓やポグロムを逃れて、建設ラッシュの谷間の町に集まってきたのである。

ポルトヴァの埋設と上下水道の整備は町の南、アカデミック通りから始まり、19世紀末にはその北、ヘチマン堤に沿って、すなわち、ポルトヴァを下るかたちで進められていった。埋設の跡地は緑地帯や広場となり、道路が拡幅された。ヘチマン堤は両側の道路カール・ルートヴィヒ通りとヘチマン通りを含めて整備され、周辺には金融機関、ホテル、劇場、博物館、パサー

ジュ、百貨店、映画館、カジノ、カフェなどが新たに建設され、人々の流れは、16～17世紀のイタリアの建築家によるルネサンス建築に囲まれた市庁舎周辺から西へ移動する。

ホホベルガーは、ウィーンを意識しつつ、ルネサンス様式の「フランツ・ヨーゼフ・ギムナジウム」(1876年竣工)、古典主義的な「ガリツィア領邦議会」(1881年。現リヴィウ大学)などの設計も担当している。領邦議会の建築のコンペにはウィーンからオットー・ヴァーグナーも応募していたがレンベルク市当局は、地元のホホベルガーの案を選んだ。ユリアン・ザハリエーヴィチの設計になるものには、母校であるウィーン工科大学を髣髴させるルネサンス様式の「リヴィウ工科大学(ポリテクニカ)」(1877年)、「ガリツィア貯蓄銀行」(1891年。オーナーはマルティン・ブーバーの祖父ザロモン・ブーバー。現「民俗・工芸博物館」)などがあるが、いずれもウィーンとレンベルクの連続を物語っている。この時期に同様にウィーンの様式に倣って建てられた建築には、「ガリツィア抵当銀行」(1872年。F.ポクティンスキー)、「ガリツィア信用銀行」(1877年。F.クシエンジャルスキー)、「ガリツィア総督府」(1884年。F.クシエンジャルスキー)、「オーストリア・ハンガリー銀行」(1898年。ウィーンの建築家F.フェルナーとH.ヘルマー。これもオーナーはザロモン・ブーバー)、ザッハー=マゾッホの生家である警察庁舎跡地に建てられた、シンプルなルネサンス様式の「ホテル・セントラル」(1884年。E.ガル)とバロックの要素も併せもった「グランド・ホテル」(1893年。E.ヘルマントニークとL.マルコーニ)、ルネサンス様式の「民族博物館」(1903年。J.K.ヤノフスキーとL.マルコーニ)、重厚なバロック様式の外観に、瀟洒なユーゲントシュティールの内装を備えた「貴族カジノ」(1898年。F.フェルナーとH.ヘルマー)などを挙げることができよう。そして埋め立てられたポルトヴァの真上には、ヘチマン堤の北端を画して、ポルトヴァに対する記憶を永遠に封印し重石するかように、壮麗なバロックとルネサンス様式の円柱とアレゴリーに飾られた「オペラ劇場」(1900年。Z.ゴルゴレフスキー)が聳えた。

同時期に市の電化も進み、1881年にはガリツィア領邦議会の議場に電灯がとまり、1883年には市庁舎にレンベルク最初の電話が設置され、市参事会と

消防署を始めとするいくつかの施設とを結び、1894年に全ガリツィア博覧会の開催にあわせて中央駅と博覧会場を結ぶ路面電車が走り、レンベルクは、オーストリア・ハンガリー帝国において、ウィーン、ブダペスト、プラハについて、路面電車が走る4番目の都市となり⁴¹、1900年には最初の電気の街灯が町を照らしたのであった。J.プルフラは、「クラカウが第1次世界大戦勃発まで結局ほとんど封建的な都市であり続けたのに対して、レンベルクにおいてはすでに一歩進んで、迅速に成熟しつつある資本主義的諸関係に支えられたダイナミックな成長の段階が始まっていた。ボリスラフとドロホーヴィッチの油田地帯におけるオイル・フィーバーは、1900年頃に金融と産業の中心地へとレンベルクの発展を加速させた」⁴²、とガリツィアの2大都市クラカウとレンベルクを対比している。

世紀の転換期にはウィーンの影響派の影響も時を移さずレンベルクに伝播し、レンベルクの町にもガリツィアの民俗的なニュアンスを帯びたユーгентシュティールの建築が増えてゆく。この時代に活躍したのは、ユリアン・ザハリエーヴィチの息子で、レンベルクのポリテクニカ、ウィーンの工科大学で学んだアルフレド・ザハリエーヴィチ、同じくレンベルクのポリテクニカを卒業したタデウシュ・オブミンスキー、イヴァン・レヴィンスキーなどであった。この時代の建築としては、「ミコラシュ・パサージュ」（1900年。アルフレド・ザハリエーヴィチとI.レヴィンスキー）、外見はルネサンス風であったが、内装はユーгентシュティール風に装飾された「ホテル・ジョルジュ」（1901年。F.フェルナーとH.ヘルマー）、オットー・ヴァーグナーのカールスプラッツ駅のパヴィリオンを髣髴させるファサードをそなえた「新中央駅」（1904年。W.サドウォフスキーとアルフレド・ザハリエーヴィチ）、バランスよくユーгентシュティールの諸要素が組み合わせられた「A.セーガルの住居兼事務所」（1905年。T.オブミンスキー）、古い建物の多い町の東側で一際目を引く「ドニストル保険会社」（1906年。T.オブミンスキー）、「ガリツィア音楽協会」（1907年。W.サドウォフスキー。現「フィルハルモニー」）、「ミコラ・ルイセンコ音楽アカデミー」（1909年。T.オブミンスキー）、「バラバンの住宅兼店舗」（1910年。アルフレド・ザハリエーヴィチ）、「ルヴフ銀行」（1911年。アルフレド・ザハリエーヴィチ）、「商工業会議所」

(1911年。アルフレド・ザハリエーヴィチ。現リヴィウ県検察庁)、「プラハ銀行」(1912年。チェコの建築家マテイ・ブレハ)などを挙げることができる。ロマン・フェリンスキーが一切の装飾を排除したガラス・カーテンウォールによる機能主義的「マグヌス百貨店」をオペラ劇場の北西に出現させたのは、ウィーンでロースハウスが竣工した2年後の1913年であった。

レンベルクがヨーロッパの近代都市へと変貌しつつあった1903年3月末、ウィーンの宮廷歌劇場監督グスタフ・マーラーがレンベルクに客演する。「オーケストラは優れていて、明らかに十分な準備をしていた」⁴³し、「聴衆はとても音楽に飢えていて、ウィーンの聴衆よりも真剣な人たち」⁴⁴であることにも満足したマーラーであったが、この町については、「レンベルクはなんて汚い町なんだろう。ホテルの外では私は一切のものに手をつける気にならない。すべてが非常にまずそうなのだ」⁴⁵とホテル・ジョルジュから妻のアルマに宛てて書き送る。マーラーにこれほどの嫌悪を起こさせたのはレンベルクのユダヤ人たちであった。「いかなる想像力をもってしても、この地のポーランド・ユダヤ人ほど汚い生き物を考え出すことはできない」⁴⁶とマーラーは続ける。街並みがどれほどウィーンを髣髴させようと、「他所では犬がしているように当地を彷徨っている」⁴⁷この地のユダヤ人プロレタリアートの生態はマーラーには耐え難かった。「彼らと私の血が繋がっているだって?! 人種理論 (Racentheorie) もこんな証拠を目の当たりにすると、なんと間の抜けたものにみえることか」⁴⁸と続ける。ドイツ文化に同化していたボヘミアのユダヤ人家庭に生まれ、6年前にカトリックの洗礼を受けていたマーラーは、レンベルクで目の当たりにしている「ポーランド・ユダヤ人」、すなわち東方ユダヤ人たちと自分との間には人種的なつながりはないと言っているのではなく、そもそも「人種」というものはない、と言っているのである。当時の人種的反ユダヤ主義者であるウィーン市長カール・ルーエガーが唱える「人種」の概念はそもそもマーラーには存在しなかった。「誰がユダヤ人であるかは私が決める」⁴⁹というルーエガーの言葉は、「人種」が到底「理論」たり得ないことを自ら曝いており、マーラーの目にはなんと「間の抜けた」ものに見えていた。

マーラーがやってくる9か月ほど前の1902年5月、レンベルクの建設労働

者たちは、社会民主主義者の指導のもと、長時間労働と低賃金、そして他所からやってきた者たちの雇用に反対して2週間以上にわたるストライキを行った。その一部始終を目の当たりにしたフランコは、即座にウィーンの週刊誌「デイ・ツァイト」6月7日号に、このストライキの顛末を次のように書き送る。

この争いにおける当局の姿勢はたいへん消極的であった。当局は平穩を望んでいるだけであり、争議の調停など端から彼らの頭にはなかった。当局は社会民主主義者の指導者たちを待み、「おとなしくしていればきっとよいことがある」と労働者たちを説得するよう、指導者たちに繰り返し厳命した。もちろんよいことなど何一つ起こりはしなかった。ストライキをしている人々の困窮は嵩じた。耳触りの良い言葉や約束に対する信頼は次第次第に低下していった。ついに6月1日土曜日にストライキは調停されそうであった。建設企業の代表は譲歩の姿勢を示した。最重要課題は一致を見た。翌朝、すべての陣営の代表が集まり、再度合意し、最終的な契約にサインすることとなった。果たしてその日曜日、企業側の代表者たちはまったく姿を見せず、それに関して一言もなかった。怒った労働者たちは総督府に陳情団を送り、総督に対して、ストライキを行っている労働者たちの絶望的な状況と、約束を破った企業側の振る舞いを訴えた。総督はできる限りの手を尽くすことを約束し、指導者たちに群衆を静めるよう再度求めた。[...] どれくらいの人数が建設労働者のストライキに直接参加していたのかは分からない。500人、1,000人、あるいは1,500人であったとしても、月曜日にリング広場や大きなストウジェレッツキー広場に密集していた夥しい人々のなかではストライキ参加者はごく少数であった。レンベルクにおいてこれほど多くの貧困と悲惨と絶望とが一度に見られたことはこれまでになかった。建設労働者のストライキは、完全に発症してしまった病ではなく、はるかに深刻で憂慮すべき病の比較的無害な兆候にすぎなかった。なぜならこれは掌握しやすく規制することが可能であったからである。その病の病原菌は、ガリツィアに

において何十年も前から文字通り培養されてきたのである⁵⁰。

ガリツィアの「病の病原菌」とは、すでに見たとおり、農村、石油地帯を覆っていた貧困である。ガリツィア東部の農村地帯においても、低賃金での労働を強いられていた農業プロレタリアートが、1900年に大土地所有者の土地の耕作を拒否しストライキを行っていた⁵¹。

レンベルクの建設労働者のストライキは、結局実力によって鎮圧されることになる。

当局は夥しい群衆に向かって騎兵の一個中隊を出動させ、ヴェンツとかいう名の極めて偏狭な警部に指揮させたのであった。軽騎兵の出現はとてつもないパニックを引き起こした。[...] それに続いて起きたことは筆舌を超える。密集する群衆に襲いかかる軽騎兵、投石が雨霰となって軍隊を迎え撃ち、3度にわたる熾烈な攻撃ののちついに軍隊はストウジェッツキー広場から放逐され、バリケードが急拵えされると、新たな軍隊が投入され、群衆に向けての4回の小銃の一斉射撃、そのあとまた四散する人々、門に身を隠している人々に対する新たな、見境のない発砲、通行人の虐殺、こうしたすべては将来、詳細に叙述されるだろう。今はすべてが矛盾に満ちた細部の描写、噂と歪曲のなかで錯綜している。死者たちばかりが静かである。その数は現在のところ4人。幾人かの重傷者たちがその数を増やすことになる。重傷者はおよそ50人。軽傷者は処罰を恐れてもちろん申し出てはいない。殆どの死者と負傷者はストライキとは全く関係ない。その中には学童たち、商人、露天商たちが含まれている。何人の造反者が逮捕されたのかは分からない⁵²。

「当局は関わりを否認し」、「ヴェンツ氏は服務規程に基づいて行動したと断言し」、「総督府は公式の通信社を通じて、一連の出来事を、取るに足りないささやかな突発事であると述べ、ただし、若干の治安案乱者が非人間的なやり方で幾人かの軽騎兵を虐待し、二三の労働者が軍に向かって発砲したこ

とは遺憾である」⁵³と総括し、1902年6月のレンベルクにおける建設労働者のストライキは終熄した。「迅速に成熟しつつある資本主義的諸関係」の矛盾に支えられたレンベルクの近代化であった。

3.

19世紀末から20世紀初頭にかけての改造で、「小ウィーン」ともいわれ、「ソヴィエト時代には、パリやローマが舞台になる映画はリヴィウで撮影された」⁵⁴というほどの西欧風の町並みを手に入れたレンベルクではあったが、「一王国の首都に川がないなどというのはヨーロッパではほかに例がない」という100年以上も前のハケットの言葉が誇張ではなく事実となってしまったとき、この町の人々は水への渴望を覚えるようになった。定款都市となり、電灯がとまり、路面電車が走り、ウィーンの食料品の名店ユリウス・マインルが出店しようと、「水がない」、「川がない」のは「一王国の首都」にとっては致命的な欠陥と感じられた。この町にプラハやクラクフのような伝説がないことさえ「川がない」せいであるかのようにヴィットリンには思えた、とはすでに見たとおり。19世紀には川に蓋をし、公園、道路、緑地にすることが都市の近代化であり進歩であると考えられ、パリでは、1828年から1844年にかけてピエーヴル川が覆い隠され、ウィーンでは、1890年から1910年にかけて、すなわちポルトヴァ埋設とほぼ同時期にウィーン川が暗渠化された。だが、パリもウィーンもその景観から水を失うことはなかったが、レンベルクは町で唯一の川を埋め立ててしまった。「町がこの犯罪を犯し、崇りが住民にはね返った」⁵⁵のである。「川がない」ことはレンベルクの人々の心の底に重く蟠った。

だがレンベルクの人々は一つの発見によってこの「崇り」を解かれることになる。1910年前後にレンベルクの古典語ギムナジウムに通っていたヴィットリンは、町の北西部にあるコルトムフカという小高い丘で「不思議なことが起こると聞かされた。」

そこには、ささやかではあるが、とても重要な一軒の家があり、激しい雨が降ると家の一方の端の2本の雨樋が水を細い流れへと導き、その流れは一本の小川に注ぎ、小川は小さな流れへと注ぎ、それはブーク川に注ぎ、ブーク川はヴィスワ川に注ぎ、ヴィスワ川はバルト海に注ぐ。その家のもう一方の樋から流れ出た雨水は、同じように組み合わせられてドニストル川に流入し、それはやがて黒海に注ぐ。このようにしてルヴフは、バルト海に臨むと同時に黒海にも臨んでいる。なんのためにもう一本の川が必要だろうか⁵⁶。

「バルト海に臨むと同時に黒海にも臨んでいる」レンベルクの発見は川の不在を補って余りあり、この「不思議な」話に、川の不在を託ったヴィットリンも溜飲を下げたのであった。たしかに「この町にはたったひとつ、地形のうえで奇妙な点がある」が、それは、「川がない」ということではなく、ヨーロッパの南北の海の水源を二つながら抱えているということであり、これこそ「ヨーロッパではほかに例がない」事実として、川のない都市レンベルクの、水に餓えた人々の間に広く、深く浸透し、感動とともに伝えられた。

ヴィットリンのこの体験からおおよそ70年余りのち、現代のウクライナ人作家ユーレイ・アンドゥルホーヴィッチもヴィットリンのカタルシスを追体験している。アンドゥルホーヴィッチは、1960年にリヴィウの南東120キロほどのイヴァノ・フランキフシク（スタニスラウ）に生まれ、学生生活をリヴィウで送ったが、リヴィウは「ヨーロッパの都市学のもっとも重要な要素を奪われている。すなわち川である」⁵⁷、としたうえ、川とともにリヴィウから失われた、水に纏わる表象を数え上げる。「橋（水の上に渡された本物の橋）、河岸、水辺の草地、船着き場、船、水車、土手、島、水路」⁵⁸、「素性の知れない船乗りたち、ニンフ、ネレイデス、セイレン、海蛇、土左衛門、鱗で覆われた龍、鎧をまとった亀。」⁵⁹だがアンドゥルホーヴィッチも、この町を「バルト海と黒海という二つの海の分水嶺が走っている」ということを知ったときの、「一瞬にして私を捕らえた、心からの、ほとんど子供のような感動を私は覚えている」⁶⁰と回想している。

そしてアンドウルホーヴィッチは、「分水嶺」にただ「川の不在」の補償を見出しているだけではなく、ヨーゼフ・ロートの「境界線の消えた町」⁶¹というレンベルクの形容を援用しながら、「分水嶺」という言葉にこの町を特徴付ける象徴性を付与しようとしている。ロートは、レンベルクの分水嶺について知っていた節はないが、ロシア語、ポーランド語、ルーマニア語、ドイツ語、ルテニア語（ウクライナ語）、イディッシュ語が耳に入るこの町の「民族的・言語的多様性」⁶²、「多言語の多彩さ」⁶³こそこの町の強みであると述べている。それを承けてアンドウルホーヴィッチは、ダニーロによって創建されて以来、多様な民族と文化が流入し、混住してきたリヴィウに「同時に多くの文化に属し、一つの文化には専属しないという『分水嶺的性格』（Wasserscheidigkeit）が見られるかもしれない」⁶⁴、「13世紀の半ばに王の弓から放たれた矢は、正鵠を射たのであった」⁶⁵と述べている。

4.

レンベルクの「分水嶺的性格」を言うならば、ロート＝アンドウルホーヴィッチが述べる、「流入」による境界線の消滅の場であると同時に、そこから再び人々がそれぞれの「民族的・言語的多様性」を背負って四方へ「流出」してゆく場としてのレンベルクも付け足さなくてはならないだろう。「分水嶺レンベルク」は、ガリツィアの各地からレンベルクへやってきて、ウィーン、ベルリン、パリ、ニューヨーク、パレスチナ、バウジェツへと散っていった東方ユダヤ人たち、あるいはここからヴロツラフへと移住させられたポーランド人たちの「流出」の軌跡をも象徴的に表している。

たとえば、俳優アレクサンダー・グラナハは1890年にガリツィアの東端、ロシア国境に近いヴィエジボヴツェにユダヤ人のパン屋の息子として生まれる。首都レンベルクからはおよそ200キロ隔たった、ウクライナ人が150家族、ユダヤ人が4家族暮らす寒村であった。グラナハはパン職人の修行をするために兄弟を頼って1905年、14歳の時にレンベルクにやってくる。

この間にレンベルクを案内してもらった。明るくて清潔で広いカジミエジョフスカ大通りには、ガラスの壁の大きな商店が並び、長い軌道を馬が小さな車両を引っ張り、別の通りではレールの上を電車が走っている。長い鬚を生やし、高いシルクハットを被ったユダヤ人たちが証券取引所の角に立って、大きな取引の話しをしていた。歩道で、また街角では果物が売られていた。そんな角の一つに私の兄弟たちも果物の屋台を出していた。いろんな種類の石鹸、カトライナーの麦芽コーヒー、レストラン、騎馬サーカス、ポーランド・オペラ、ウクライナ演劇、イディッシュのブローダー・シンガーの宣伝ポスターが目に入った。そして沢山の市場。特に学校前の市場では人々があらゆる物を互いに売り買いしていた。書物、魚、靴紐、ピロシキ、生の、あるいは調理した肉、バター、チーズ、アイロン、鏡、パン、衣服、クワス、背広、スープ、子犬、猫、おもちゃ、なにもかもごちゃ混ぜであった⁶⁶。

これはマーラーがこの地に客演した2年後のことであった。「なんて汚い町なんだ」と西方からやってきたマーラーを嘆息させたレンベルクも、東方の片田舎、「半アジア」(カール・エーミール・フランツォース)の辺境から出てきたグラナハには「明るくて清潔」な、近代的な大都会であった。大都会の景観、溢れる商品に目を見張ったグラナハであったが、彼の人生を根底から覆したのは、ギンペルのイディッシュ劇場⁶⁷で初めて観た演劇であった。

何という世界！3時間足らずの中に人生のすべてがある！幾人もの人生！なんと偉大で、現実的で、超現実的な現実！〔…〕なんという魔術的な奇跡！！〔…〕私がかつて経験してきたすべてのことが突然につまらない事柄に思える！〔…〕

これこそ私にふさわしい世界だ！ここで私は生き、ここで私は語り、叫び、演じ、私の好奇心について、私の夢について語りたい！私の憧れについて！私は、この道を行こう！この世界に飛び込もうと密

かに固く決心した!⁶⁸

演劇の持つ根源的な力が十代半ばの無垢の感性を直撃した瞬間であった。「どうやってこの世界へ入ったらいいいのか私にはまだ分からなかったが、一つことは明らかであった。すなわち、この世のどんな力も私を引き留めることはできず、私がこの世界に入ることを阻止できないということである」⁶⁹とグラナハは続ける。グラナハはその後16歳でレンベルクからベルリンに出て、ドイツ語を学びながら1917年にマックス・ラインハルトが主宰するドイツ劇場俳優学校を卒業し、念願の俳優としてデビューする。第1次世界大戦での従軍を挟み、ムルナウの『ノスフェラトゥ』（1922年）で映画界にも進出し、1933年にアメリカに亡命し、ハリウッドで性格俳優としてデビューし、『ニノチカ』（1939年）でグレタ・ガルボと共演し一躍世界的に有名になる。自伝『ひとりの人間が行く』の出版は目にする事なく、グラナハは1945年にニューヨークで息を引き取っている。グラナハにとってレンベルクは、単なるトランジットの地ではなく、人生の分水嶺ともなったのである。

あるいは、レンベルクは、ガリツィア南東の辺境から「流入」したゾーマ・モルゲンシュテルンと北東の辺境から「流入」したロートにとって生涯の友との出会いの場となった。モルゲンシュテルンは1890年、すなわちグラナハと同年にグラナハの生地ヴィエジボヴツェの北60キロほどの農村地帯にあるブズアヌフに、敬虔なユダヤ人農場管理人の息子として生まれている。タルノボルのギムナジウム生徒であった「1909年か1910年のこと」、レンベルクで「ガリツィア・シオニスト中等学校生（ギムナジウム生徒）会議」が開かれ、モルゲンシュテルンは、タルノボルのギムナジウムの代表の一人として参加し、そこでブローディのギムナジウム生徒ロートと初めて出会う⁷⁰。ロートはギムナジウム時代に休暇中にはしばしばレンベルクの「 Hoffman通り7番」⁷¹の叔父の家で過ごしており、その時は「代表としてではなく、ただ好奇心から会議に忍び込んだだけ」⁷²であった。その場は互いに名乗りあう程度で終わり、親密な交遊が始まるのは、ロートがレンベルク大学からウィーン大学に移り、すでにそこで学んでいたモルゲンシュテルンと再

会する1914年以降であった。第1次世界大戦に従軍した後、ロートはベルリンに移り、『ラデツキー行進曲』をはじめとする小説を発表しながら、ジャーナリストとしてヨーロッパ各地を巡り、1939年にモルゲンシュテルンに看取られるようにしてパリに没する。

モルゲンシュテルンもレンベルク大学、ウィーン大学で学んだ後、「ベリリナー・ターゲスブラット」、「フランクフルター・ツァイトウング」などで文芸欄を担当しながら、代表作となる『奈落の火花』3部作⁷³を書き続けてゆく。この作品はウィーンで同化ユダヤ人として育てられた孤児の青年が、叔父によって発見され、亡父の故郷であるガリツィアのハシディームの世界へと回帰してゆく物語であるが、その第1部『失われた息子の息子』の原稿を読んだロートは、これを「傑作」⁷⁴とした上、「僕の本の中では僕はユダヤ人たちを読者のために翻訳する。君は彼らがあるがままに表現している」⁷⁵と評している通り、この作品では、ウクライナ人、ユダヤ人、ポーランド人が混住する20世紀初頭から戦間期にかけての東ガリツィアの農村が克明に描かれている点でも大変興味深い。

モルゲンシュテルンも1938年3月13日、すなわちナチス・ドイツによるオーストリア併合の日にウィーンからパリへ逃れ、ロートが滞在していたトゥルノン通りのオテル・ド・ラ・ポストで暮らすことになる。レンベルクに始まりパリに終わる30年余りの交遊は、モルゲンシュテルンの『ヨーゼフ・ロートの逃走と最期』に詳細に、哀惜を込めて記録されている。なかでも1939年5月、ロートがモルゲンシュテルンを誘って、ホテルの近くのリュクサンプール公園で過ごしたひと時は、ロートが最後までガリツィアとの紐帯を保っていた挿話として印象深い。ロートはこの時期にはすでに強度のアルコール中毒に起因する何度かの心神喪失、譫妄、手の震えなどの症状を示し、杖なしではもはや立ち上がることも歩くこともできなかった。

やがて私たちは公園に入った。歩くことは彼には確実にたいへんな努力を要することであった。私は最初のベンチでちょっと一休みさせようと思った。だがようやく彼を座らせることができたのは、私たちが大きな木陰の並木道に達したときであった。[…]

驚いたことに彼はまだ帰りがらなかった。今度は彼は、この時刻には人気のない離れた並木道へと私を連れて行った。「なぜ君をここに引きずり込んだか分かるか。僕の好きな二つの歌を君に歌って欲しかったからさ。ホテルの部屋では多分誰も歌を歌ったり聴いたりする気にはならないだろうからね。」私は彼のためにまずユダヤの歌「むかしむかし一つのお話がありました」を歌い、ついでまた彼の求めに応じてウクライナ語の「ヒーラ、ヒーラ」を歌った。両手で杖にすがりながら、頭を垂れて彼は聴いていた。それから彼はしばらくの間沈黙していた。彼の蒼白な指の上に涙が落ちるのが見えた。私は息が詰まった。私はロートが素面の状態で人前で泣くのを見たことはなかった。帰路はふたりとも辛かった。公園の中でなければ、距離が短かくてもタクシーに乗せたことだろう。彼にとってはとても苦しい道りとなった。時々彼は腰を下ろして靴紐を解いた。

これが彼に歌を歌って聞かせた最後となった。彼との最後の散歩となった⁷⁶。

ロートはこれまでもしばしば、自分は音痴だからといってモルゲンシュテルンにガリツィアの、ユダヤやウクライナの歌を歌ってくれるように頼んでいる。最初はウィーンでの学生時代にふたりで近郊のローダウンにハイキングに行ったときのことであった。ロートが最後に聴いた上の2曲はその頃からことのほかロートが気に入っていた悲しい曲調の民謡であったとモルゲンシュテルンは記している⁷⁷。ふたりがレンベルク経由でパリへ持ち込んだガリツィアであった。

ロートが息を引き取ったのはこの24日後であった。モルゲンシュテルン自身はその後さらにナチスからの逃亡を続け、1941年にニューヨークに辿り着く。同じくロートの友、そしてモルゲンシュテルンの友でもあったヴィットリンがポルトガル経由でニューヨークに逃れたのも1941年であった。

しばしば引用してきたヴィットリンであるが、1896年に、ロートの故郷ブローディの北西40キロ、当時のロシア領に近いドミトリフのユダヤ人小作人の息子として生まれる。すでに述べたように、1906年10歳の頃レンベルクへ

やってきて、少年期から青年期の18年間をレンベルクで過ごしている。レンベルクで暮らした場所は「ホフマン大修道院長通り」、すなわち、ロートがブローディのギムナジウム生徒としてしばしば滞在し、またレンベルク大学の学生として寄宿した叔父の家のある通りであった。おそらく何度もすれ違っていたはずであるが、不思議とこの時点では二人に交渉はない。二人の交遊が始まるのは、二人がウィーン大学に入学してからである。「ロートの伝記のかなり多くの部分は私の伝記の一部でもある」⁷⁸とヴィットリン自身述べている通り、ロートにとってはヴィットリンも生涯の友となった。ウィーン大学の学生であった1916年に二人はそろってオーストリア軍に志願し、1918年にヴィットリンはレンベルクに戻りそこでギムナジウムの教師となるが、1922年にレンベルクを去り、ウッジの市立劇場の脚本作者となる。レンベルクの「失われた息子」⁷⁹という自称には、その時の未練、立ち去りがたい気持ちが込められている。ヴィットリンは寡作であったが、1935年に、一農民兵士の視点から描かれた反戦文学として評価の高い『地の塩』⁸⁰を出版した後、1939年にポーランドを去り、パリ、スペイン、ポルトガルを経て1941年にニューヨークに辿り着く。

この年レンベルクはドイツ軍の占領下に入る。8月半ばから、12歳以上のすべてのユダヤ人は、青いダヴィデの星が描かれた白い腕章つけることを義務付けられ⁸¹、11月16日から1か月の間に、市の4地区全域に住むユダヤ人は市北部、レンベルクとブローディを結ぶ鉄道路線によって市中心部から隔てられた、ザマルスティヌフとクレパルフに指定されたユダヤ人居住区、すなわちゲッターに移住させられた⁸²。ヤノフスカ通りの、かつて製粉機工場の跡地には、のちの悪名高いヤノフスカ強制労働収容所が建てられた⁸³。親衛隊コマンドは、シナゴーク「黄金の薔薇」、改革派シナゴーク、ユダヤ人墓地などのユダヤ文化を破壊し、墓石でもって、墓碑銘を上にして、ヤノフスカ収容所への道路を補強した⁸⁴。1942年初めにはベウジェッツの絶滅収容所が完成し⁸⁵、ポーランド地区のユダヤ人の絶滅を目指した「ラインハルト作戦」が開始され、3月にルブリン、レンベルクからのユダヤ人の移送が始まり、ヤノフスカ収容所は、強制労働収容所、ベウジェッツへの一時収容所、そして、レンベルク、ガリツィアのユダヤ人の絶滅収容所と3つの役割が与

えられた⁸⁶。この間にもゲットー、収容所内外でユダヤ人の虐殺は容赦なく恣意的に日常茶飯に行われた。1944年7月にレンベルクは赤軍によってドイツ軍から解放されるが、9月末にレンベルクに生存していたユダヤ人はおよそ3,400人、そのうちレンベルク生まれであるか、ドイツ軍占領時点でレンベルクに住んでいたユダヤ人は823人にすぎなかった。大戦前の1941年6月末の時点でレンベルクで暮らしていたユダヤ人は15～16万人であった⁸⁷。

レンベルク解放の1年余り前、「1943年6月、ゲットーの最終的抹殺の日、500人以上が下水道網を通して逃亡しようとした。しかし出入り口は見張られていたので、彼らが町の別の地区で再び外へでようとしたときに、ほとんどの逃亡者たちは捕まった。150人以上は下水道に隠れていようとしたが、しかし1週間以内に130人が自殺した」⁸⁸とレンベルクのゲットーを生き延びたユダヤ人の一人レオン・W・ヴェルスは述べている。ユダヤ人ゲットーを南北に貫いていたのはペウテフ通り、すなわち暗渠化されたポルトヴァ川の上に設けられた道路であった。ゲットーの住民がまず逃げ込んだのは、「下水道の役割へと格下げされた」ポルトヴァ川であった。下水道部門で働いていたポーランド人の助けもあって、奇跡的に14か月を下水道網で生き抜いたのは僅か10名であった⁸⁹。

第2次世界大戦後のポーランド国境の確定により、レンベルクはソヴィエト・ウクライナの領土内に含まれることとなり、レンベルクのポーランド人たちは、新たな国境の向こう側、大部分破壊されていたもとのドイツの都市ブレスラウ（ヴロツワフ）に移住させられ、逆に旧ポーランド領内のウクライナ人たちはレンベルク移住させられた。

ポーランド人たちのルヴフの町に対する愛着は大変に強かったので、この町がソヴィエト連邦内にとどまると聞かされても彼らの多くはこの町を立ち去ろうとはしなかった。

1945年3月12日に、レンベルクでは86,671人のポーランド人のうち、出国を申し出たのは29,919人だけであった。7,472人はすでに移住させられていた。〔…〕大量逮捕という手段によって結局、ほとんどすべてのポーランド人が出国を登録させられた。レンベルクのポーランド

人たちはいくつかの記念碑を持ってゆくことを許された。残りは、ポーランド支配と「ウクライナの民族文化に対する侮辱」のシンボルとして1947年に破壊された⁹⁰。

こうしてルヴフは、この町から流出したポーランド人の記憶の中だけの町となった。チェスワフ・ミウォシユが、「胸の熱くなる一冊」⁹¹と呼ぶ『わがルヴフ』を「失われた息子」ヴィットリンがニューヨークにおいて執筆するのは、もはや帰郷することが叶わなくなった1946年のことであった。

レンベルクの「分水嶺性」は、コルトムフカの一軒の屋根に降った雨がバルト海と黒海に流れ込み世界と繋がっているように、様々な理由でこの町から流出していった人々によって、世界の様々な地域から、レンベルク／レンベリク／ルヴフ／リヴィウとして想起されることによってこの町が世界と繋がっていることをもまた象徴的に示している。

注

- 1 ドイツ語で「レンベルク」(Lemberg) と呼ばれるこの町は、ウクライナ語では「リヴィウ」(Львів)、ポーランド語では「ルヴフ」(Lwów)、イディッシュ語では「レンベリク」(lemberik) と呼ばれる。固有名が総じてそうであるように、この町の呼称は、対象を指し示すと同時にその名を口にする者を、その文化的・言語的背景ごと、すなわち発話者のアイデンティティを指し示めし、たとえばこの町を「レンベリク」と呼ぶ者を、「レンベルク」、「ルヴフ」あるいは「リヴィウ」と呼ぶ者から区別する指標としても機能してきた。そのため本稿では呼称の統一は図らずも文脈に委ねた。「クラカウ」(Krakauドイツ語)も同じように「クラクフ」(Krakówポーランド語)、「クラキフ」(Краківウクライナ語)、「クロケー」(krokeイディッシュ語)であるが同様に扱った。また本稿で中心的に扱われる川の名前、「ポルトヴァ」(Полтва)もウクライナ語であり、ポーランド語では「ペウテフ」(Peltew)、ドイツ語では「ペルテフ」(Peltew)となるが、これも同様に扱い逐一注記はしない。その他の固有名については、必要に応じて注記する。
- 2 イラーセクによれば、プシェミスル朝の始祖リブシャ (Libuša) は未来を予見することのできる巫女であり、居城ヴィシェフラトの下を流れるヴルタヴァで斎戒沐浴するのが慣わしであったという。ある時、川の深みから現れた啓示の霊に憑

かれ、戦乱に荒廃するボヘミアの姿を流れの中に見ると、長子の黄金の揺籃をヴルタヴァの深みに沈め、「わが息子の揺籃よ、いつの日か時代が再びおまえを光のなかへ呼び出すまで、川底深くに沈んでいるがよい。祖国の夜もいずれは終わるであろう。再び明るい夜明けを迎え、わが民族は幸運に輝くであろう。苦しみに浄化され、愛と労働によって強靱となったわが民族は新たな輝きの中に立ち上がり、望みを満たし、再び栄光に達するであろう。そのときおまえは再び流れの闇のなかから輝き、太古より祖国の救済者と定められていた嬰兒を載せて光に向かって浮かび上がるであろう」と予言する。この予言通り、リブシャと夫プシエミスの治世の後、チェフの国（チェコ）は骨肉相食む戦乱に覆われるが、長い暗黒の夜の時代が過ぎ去ると、黄金の揺籃が救国の主となるプシエミスル家の末裔を載せヴルタヴァの深みから浮かび上がったという。

Vgl. Alois Jirásek, *Böhmens alte Sagen*. Praha 2006, S.58-61

- 3 B. ヴィソツキ（小原雅俊訳）「ヴァンダ」。吉上昭三／直野敦／小原雅俊／長谷見一雄／森安達也共訳編『ポーランドの民話』1980年、317-318頁。一部語句を改めた。ヴァンダ伝説にはさまざまあるが、プロニスワフ・ヘイドゥクはヴァンダをクラクス侯の妻としている。

参照：プロニスワフ・ヘイドゥク（土屋直人訳）「ヴァンダ伝説」。小原雅俊編『文学の贈り物—東中欧文学アンソロジー—』2000年、50頁。

- 4 Wittlin, Józef, *Mein Lemberg*. Frankfurt am Main 1994, S.33-34
Wittlin, Józef, *Mój Lwów*, Wrocław 2017, S.33-34
- 5 Крипякевич, Иван, *Историчні проходи по Львові*. Львів 2007, S.11
- 6 Ebd., S.58
- 7 Ebd., S.81
- 8 Hacquet, Balthasar, *Hacquet's neueste physikalisch=politische Reisen in den Jahren 1791, 92 und 93 durch die Dacischen und Sarmatischen oder Nördlichen Karpathen*. Dritter Theil. Nürnberg 1794, S.173-174
「ツォル」(Zoll)は、地域差はあるが、およそ2.5~2.6センチメートルであった。
- 9 Rohrer, Joseph, *Bemerkungen auf einer Reise von der türkischen Gränze über die Bukowina durch Ost- und Westgalizien, Schlesien und Mähren nach Wien*. Wien 1804, S.162
- 10 Kratter, Franz, *Briefe über den itzigen Zustand von Galizien. Ein Beitrag zur Statistik und Menschenkenntnis*. Zweiter Teil. Leipzig 1786, S.182
- 11 Wittlin, 1994, S.33-34. Wittlin, 2017, S.33-34
- 12 現在の自由大通り11と13。
- 13 Sacher-Masoch, Leopold von, *Souvenirs. Autobiographisches Prosa*. München 1985, S.60-61
- 14 Ebd., S.61
- 15 アルフレッド・フィエロ『パリ歴史事典』普及版2011年、261頁

- 16 Csendes, Peter / Opll, Ferdinand (Hrsg.), *Wien. Geschichte einer Stadt von 1790 bis zur Gegenwart*. Wien 2006, S.103
- 17 *Історія Львова*. Том 2, Львів 2007, S.28
- 18 ヴィクトール・ユゴー『レ・ミゼラブル』5（西永良成訳）筑摩書房 2014年、182頁
- 19 *Історія Львова*, ebd., S.177
- 20 Frank, Alison Fleig, *Oil Empire. Visions of Prosperity in Austrian Galicia*. Cambridge 2005, S.56f.
- 21 Franko, Ivan, *Die Auswanderung der galizischen Bauern*. In: ders., *Beiträge zur Geschichte und Kultur der Ukraine*. Berlin 1963, S.278
- 22 Ebd., S.278f. ちなみにRosenfeldは、1881年から1910年の30年間のガリツィアからの移民の総数を852,663人と算出している。そのうち、ユダヤ人は25万人以上、すなわち30%以上であった。
Vgl. Max Rosenfeld, *Die polnische Judenfrage: Problem und Lösung*. Wien, Berlin 1918, S.81
- 23 Landau, S.R., *Unter jüdischen Proletariern. Reiseschilderung aus Ostgalizien und Russland*. Wien 1898, S.30
- 24 Franko, *Schafhirt*. Ebd., S.220
- 25 Frank, S.20
同じ1898年にランダウは、「労働者は殆どがユダヤ人である。ボリスラフの9,000人の労働者のうちでユダヤ人は6,000人以上である」と報告している。
Vgl. Landau, ebd., S.30
- 26 Frank, S.77
- 27 Ebd., S.93
- 28 Ebd., S.94
- 29 Ebd.
- 30 Ebd., S.242
- 31 Orłowicz, Mieczysław / Kordys, Roman, *Illustrierter Führer durch Galizien*. Wien und Leipzig, 1914, S.243
- 32 Frank, S.93
- 33 Ebd., S.4
- 34 *Історія Львова*. Ebd., S.216
- 35 Frank, S.59
- 36 Bernatzik, Edmund (hrsg.), *Die österreichischen Verfassungsgesetze mit Erläuterungen*. 2. sehr vermehrte Aufl. Wien 1911, S.1132ff.
- 37 Wenedikter, Richard, *Die Karpathenländer*. In: Karl Gottfried Hugelmann (hrsg.), *Das Nationalitätenrecht des alten Österreich*. Wien-Leipzig 1934, S.692

- 38 ウィーン、ブラハ、ブリュン、オルミュッツ、リンツ、グラーツ、ザルツブルク、インスブルック、クラゲンフルト、トリエスト、ライバツハなど17都市はすでに1850年に定款が与えられていたが、1860-70年代に定款都市に格上げされた都市は、チェルノヴィッツ、クラカウ、イーグラウ、ヴィーナー＝ノイシュタット、クレムジールなど16都市であった。
- Vgl. Jiří Klabouch, *Lokalverwaltung in Cisleithanien*. In: Wandruszka / Urbanitsch (hrsg.), *Die Habsburgermonarchie 1848-1918*. Bd.II. Wien 2003, S. 289, Anm.40)
- 39 LGBI.(Landes=Gesetz=und Verordnungsblatt) Galizien, Nr.79 (14.Oktober 1870), § 30
- 40 1910年の宗教別人口は、ローマ・カトリック105,500人 (51.2%)、ギリシャ・カトリック39,300人 (19.2%)、ユダヤ教57,400人 (27.8%) となっている。
- Vgl. Christoph Mick, *Kriegserfahrungen in einer multiethnischen Stadt: Lemberg 1914-1947*. Wiesbaden 2010, S.30
- 41 *Історія Львова*. Ebd., S.219
- 42 Purchla, Jacek, *Wien, Krakau und Lemberg auf ihrem Weg in die Moderne*. In: *Mythos Galizien*. Wien 2015, S.143
- 43 Mitchell, Donard (hrsg.), Alma Mahler, *Erinnerungen an Gustav Mahler / Gustav Mahler, Briefe an Alma Mahler*, Frankfurt/M, Berlin, Wien 1971, S.260
- 44 Ebd.
- 45 Ebd., S.263
- 46 Ebd.
- 47 Ebd., S.260
- 48 Ebd.
- 49 カール・E・ショースキー (安井琢磨訳) 『世紀末ウィーン—政治と文化—』 2006年、185頁
- 50 Franko, *Die Lemberger Unruhen*. Ebd. S.409-410
- 51 Vgl. Franko, *Bauernstreiks in Ostgalizien*. In: Franko, ebd., S.411-422
- 52 Franko, *Die Lemberger Unruhen*. Ebd. S.410. なお現代のリヴィウ史はこの時の死者数を5人としている。
- Vgl. *Історія Львова*. Ebd., S.281
- 53 Ebd., S.411
- 54 Andruchowytch, Juri, *Das Stadt-Schiff*. In: ders., *Das letzte Territorium*. Frankfurt/M. 2003, S.29
- 55 Neborak, Wiktor, *Etwas Lemberger Mythologie*. In: Alois Woldan(Hrsg.): *Lemberg*. Klagenfurt/Celovec 2008, S.103
- 56 Wittlin, 1994, S.34-35. Wittlin, 2017, S.34
- 57 Andruchowytch, *Wie Fische im Wasser*. In: ders. *Engel und Dämonen der Peripherie*. Frankfurt am Main 2007, S.55

58 Ebd.

59 Ebd., S.56

60 Andruchowytch, *Das Stadt-Schiff*. Ebd., S.28

61 Roth, Joseph, *Reise nach Galizien*. In: Klaus Westermann (hrsg.), *Joseph Roth Werke 2: Das journalistische Werk 1924-1928*. Köln 1990, S.289

62 Ebd., S.287

63 Ebd.

64 Andruchowytch, ebd.

65 Ebd.

66 Granach, Alexander, *Da geht ein Mensch*. Augsburg 2007, S.173

「ブローダー・シンガー」(Broder Sänger / Broder Singers)とは、1850年代以降、ガリツィア、ルーマニア、南ロシアを巡回し、サバトや祝日を除く週日に酒場、レストランの庭などに即席で設けられたステージで興行した、比較的小規模なユダヤ人男性歌手のグループの総称である。次第に歌の内容に合わせた衣装、身振り、レチタティーヴォが加わり、イディッシュ演劇の萌芽となった。ブローダー・シンガーの父と称されているのはベアル・ブローダー (Berl Broder) で、その名はブローディからとられているが、ここがブローダーの出生地であるかどうかは不詳である。

Vgl. *Encyclopaedia Judaica*. Jerusalem 1997 (CD-ROM edition)

67 1888年にレンベルクのスカルバク劇場の合唱団員であったヤーコブ・ベール・ギンペル (Jacob Ber Gimpel) によって創設されたイディッシュ劇団。当初は家族中心のメンバーで「城山」の麓のZur Elsterというレストランで興行した。当初の演し物はユダヤの民謡、ダンス、一幕物など、いわゆる「シュンド (shund)」(くず、がらくた、低俗芸術) であり、聴衆はビールと鯁目当てのユダヤ人地区の住民たちであった。19世期末にはギンペルは、町の中心部ヤギェロン通り (現フナチュク通り) に、木造ではあったが1400名収容のパビリオンを建て、劇団の規模も拡張し、団員の一部でウィーン、プラハ、チェルノヴィッツ、ポーランド、ドイツへの地方巡業も行うようになる。この頃にはレパートリーもゴールドファデン、ラタイネル、ホロヴィッツなどのオペレッタ、メロドラマ、月並みな古典劇となった。グラナハが訪れたのはこの時期のイディッシュ劇場であった。

Vgl. Doris A. Karner, *Lachen unter Tränen. Jüdisches Theater in Ostgalizien und der Bukowina*. Wien 2005, S.118f.

68 Granach, ebd., S.178-179

69 Ebd., S179

70 Morgenstern, Soma, *Joseph Roths Flucht und Ende. Erinnerungen*. Springe 2007, S.7

71 Bronsen, David, *Joseph Roth. Eine Biographie*. Gekürzte Fassung. Köln 1993, S.61

ブロンセンがここで“Ulica Hofmana”「ホフマン通り」としているのは、正確に

は“Ulica Pata Hofmana”「ホフマン大修道院長通り」(現在のチェホフ通り)である。

72 Morgenstern, ebd., S.7

73 *Funken im Abgrund. I: Der Sohn des verlorenen Sohnes*. Berlin 1935, II: *Idyll im Exil*. Lüneburg 1996, III: *Das Vermächtnis des verlorenen Sohnes*. Lüneburg 1996. II, III巻は、英語訳の方が半世紀近くも前に出版されていた；II: *In my father's pastures*. 1947 Philadelphia, III: *The testament of the lost son*. Philadelphia 1950. ドイツ語圏におけるモルゲンシュテルン発見の事情は、武田智孝「Muße礼賛 – Soma Morgensternの『発見』」(*Brunnen*, April 2007 Nr.444, S.6) に詳しい。

74 Morgenstern, *Joseph Roths Flucht und Ende. Erinnerungen.*, S.111

75 Ebd., S.112

76 Ebd., S.285-286

77 Ebd., S.15-16

78 Wittlin, *Erinnerungen an Joseph Roth*. In: Hermann Linden (Hrsg.), *Joseph Roth. Leben und Werke. Ein Gedächtnisbuch*. Köln + Hagen 1949, S.48

79 Wittlin, 1994, S.18, Wittlin, 2017, S.17

80 *Sól ziemi*. Warszawa 1935. *Das Salz der Erde*. Amsterdam 1937

81 Held, Thomas, *Vom Pogrom zum Massenmord. Die Vernichtung der jüdischen Bevölkerung Lembergs im Zweiten Weltkrieg*. In: Peter Fäßler, Thomas Held, Dirk Sawitzki (Hrsg.), *Lemberg-Lwów-Lviv. Eine Stadt im Schnittpunkt europäischer Kulturen*. Köln, Weimar, Wien, 1995, S.127

82 Friedman, Philip, *Roads to Extinction. Essays on the Holocaust*. Edited by Ada June Friedman. New York and Philadelphia 1980, S.262f.

83 Held, ebd., S.128

84 Ebd., S.127

85 Ebd., S.135

86 Ebd., S.136f.

87 Ebd., S.114

88 Wells, Leon Weliczker: *Ein Sohn Hiobs*. München 1979, S.275

89 Ebd., Held, ebd., S.114

90 Mick, ebd., S.553

91 チェスワフ・ミウォシユ (関口時正／西成彦／沼野允義／長谷見一雄／森安達也 訳)『ポーランド文学史』2006年、697頁

参考文献

レンベルクの建築史に関しては以下の文献を参照した。

Andreas Hofer, Elisabeth Leitner, Bohdan Tscherkes, *Lemberg Lviv Architektur & Stadt. 100 Bedeutende Bauwerke*. Wien 2012

Юрій Бірюльов, *Мистецтво Львівської сецесії*. Львів 2005

Юрій Бірюльов, *Захаревичі: Творці столичного Львова*. Львів 2010

Інститут архітектури Національного університету “Львівська політехніка”,
Архітектура Львова. Час і стилі. XIII-XXI ст. Львів 2008

Abstract

Die Wasserscheide Lemberg – Die Topografie als Symbol –

Yutaka IKARI

Im Unterschied zu anderen europäischen Städten gibt es in Lemberg (L'wiv / Lwów / lemberik) heutzutage keinen Fluss. Die Stadt Lemberg war im 13. Jahrhundert vom Haliczer Herzog Danylo doch eigentlich am Fluss Poltwa gegründet worden. Dieser einzige Fluss Lembergs wurde im Zuge der industriellen Revolution und den Modernisierungsmaßnahmen um die Jahrhundertwende vom 19. zum 20. Jahrhundert jedoch zu einem unterirdischen Abwasserkanal degradiert. Damit wurde Lemberg zu einer Stadt ohne Fluss, was viele Lemberger als großen, falen Mangel für ihre Stadt empfanden. Für so manche der Einwohner war der Verlust des Flusses gar ein Trauma. Zu dieser Zeit aber entdeckte man in der Stadt die Wasserscheide von dem Fluss Bug, der in die Wisła(Weichsel) und dann in die Ostsee mündet, und von dem Fluss Dnjestr, der in das Schwarze Meer mündet. Dies wurde so gesehen, dass Lemberg gleichzeitig sowohl an der Ostsee wie auch am Schwarzen Meer liege, und man fühlte sich kompensiert. Von Józef Wittlin stammt die rhetorische Frage „Wozu braucht Lemberg noch einen Fluss?“.

Die „Wasserscheide“ in Lemberg hat nicht nur eine geographische, sondern auch eine symbolische und kulturelle Bedeutung. Symbolisch verweist die „Wasserscheide“ auf die kulturelle Vielfalt der Stadt, d.h. die Tatsache, dass in das städtische Leben von Lemberg seit dem Mittelalter Elemente aus verschiedenen Kulturen (jüdische, polische, armenische, italienische, deutsche, tatarische, byzantinische) eingeflossen und von dort wiederum zu Orten auf der ganzen Welt ausgeströmt sind. Dies verbindet die Stadt auch

heute noch mit der Welt.

Keywords: Lemberg (L'wiw, Lwów, lemerik), Poltwa, watershed, Galizien,
Joseph Roth, Józef Wittlin, Soma Morgenstern, Juri Andruchowytch